自主性・自発性に基づく組織学習
― NPO の事例から ―
Organizational Learning Based on Voluntarism: Exploring NPO Experiences

野口 寛樹（京都大学大学院経済学研究科 博士後期課程）

【ねらいと目的】

親密圏と公共圏の再編成を考える中で、公共圏・親密圏変革の 1 つのアクターとしての NPO は忘れてはならない存在である。

社会に求められる活動を行う上で、NPO が組織として存続していくことの重要さは誰もが認めるところである。ところが公共圏・親密圏変革のアクターとしての NPO はその存続が非常に難しい。ミッション重視であることからくる個人の自主性のため、自分の意に沿わぬことがあれば組織を退出するということが可能だからである。

しかしながら、組織の運営上どうしても、参加者にとって当初の参加動機とは異なる組織運営への貢献が求められる。

本研究は、組織の存続を考える上で、組織ルーチンに注目をしたい。そして、当初の参加動機とは異なる組織運営活動に適した組織ルーチン生成について取り組みたい。以上が明らかとなれば、公共圏・親密圏変革のアクターとしての NPO の存続に関するルーチン生成の一端が明らかとなり、継続した活動を行うための示唆が与えられる。

【活動の記録】

学会発表　The 6th ISTR Asia and Pacific Regional Conference　2009 年 11 月 4 日　台湾にて

インタビュー

2009 年 2 月 28 日　山科醍醐こどもの広場

2009 年 3 月 29 日　山科醍醐こどもの広場（杖の水ころころハウス）

2009 年 7 月 26 日　山科醍醐こどもの広場（杖の水ころころハウス）

2009 年 7 月 28 日　子育て支援施設西加茂プレイセンターFKC

2010 年 3 月 14 日　京都市にある NPO 法人にアンケート票（597 法人）を送付

【成果の概要】

既存研究からすれば、以上のような活動は組織市民行動（田中 2004）と定義される。これらは通常の組織活動をサポートしパフォーマンスにプラスの影響を与えると考えられている。

組織市民行動を組織メンバーはいかに学習し、ルーチンとしているのであろうか。上野・ソーヤー（2006）によれば、学習への見方として、1. 学習のカリキュラム、2. 教育のカリキュラムの 2 点が指摘できる。教育のカリキュラムは「教授法のデザイン」であり、指示

的に教える側からの方法である。一方、学習のカリキュラムは学習者からの視点であり、学習環境のデザインが重要となる。

子供を対象とする NPO にインタビュー調査をしたところ、組織市民行動のような活動の学習形態は状況学習（Lave & Wenger 1991）がとられているということが見えてきた。学習の環境がデザインされており、学習者目線の学習法がとられているようである。その中で強調したいのは、学習を促進するリーダーの存在である。

本事例でのリーダーは、学習環境をデザインするものとしてのリーダーである。その特性として特に強調されるのはコーディネーターとしてのリーダーである。彼女らはすべてに対してオープンであり、謙虚である。そして自らの影響力を行使することを極力避ける。必要なのはリーダー個人が知識を囲うことではく、成員またそこにある人工物からの相互学習である。それをコーディネートするリーダーの必要性が確認されている。

以上リーダーの特性について、理論と事例からすればコーディネーター型、知識集約型、が類推される。どちらが組織市民行動を学習する上で重要なのであろうか。アンケート調査を行う。

台湾での学会 ISTR